

平成30年11月5日発行(毎月5日1回発行)  
第58巻11月号(通巻712号)

# 風土



味噌これぞ葱鉄砲をくらひても

（句集『高蘆』より昭和四十四年作）

この句には「田舎味噌を贈らる」と前書きがあります。秋田県横手市の林檎農家で、「風土」同人の森屋けいじ氏の自家製味噌です。また根深汁にした葱を噛むと、葱の熱々の芯が口中に飛び出し、火傷しそうになることがあります。これを「葱鉄砲」と言います。それにも増して味噌がおいしいのです。おもわず「味噌これぞ」と褒めたたえました。

みそさざい友を跨ぎて茶を淹るる

（句集『高蘆』より昭和四十五年作）

桂郎師の七畳小屋にもお弟子さんから鏡餅が届きました。しかしいろいろ飾るのも面倒です。橙の代わりにもらい物の柚子をひよいと乗せ、執筆用の文机の隅に鏡餅を置きました。これで七畳小屋も正月を迎えられます。しかし桂郎師が、寒さしのぎに「湯豆腐で一杯」とやるものですから、正月まで待たずに柚子が消えることもしばしばでした。

## 喜色たり火のつく足踏み稲扱機

(句集『幻』より平成七年作)

この句は前回採りあげた「てんびんの撓ふ西瓜と」一歳児」の句と同様中国で得られたものです。「喜色たり」とは「喜色満面たり」のことです。そして「足踏み稲扱機」です。現在の機械の脱穀ではなく、足で漕いで稲穂からモミを外すものです。日本でも昭和四十年代までは主流でした。さあ、足で漕ぐたびに稲扱機の回転が速くなります。器師はぐわんぐわんと回る佳境の音を「火のつく」と喩えました。豊作の喜びの音です。

## 日向ぼこあの世が混んで来たりけり

(句集『幻』より平成七年作)

風の無い日溜りの椅子での「日向ぼこ」は冬の楽しみのひとつです。しかし日向ぼこをすると、何故「あの世が混んで来たりけり」なのでしょう。それは虚子の「日に酔ひて死にたる如し日向ぼこ」が答になります。心はあの世と行き来しているのです。近親や桂郎とあの世でしばらく「日向ぼこ」を楽しむ器師です。

ゆふべのいろの

南うみを

雑魚跳ねてゆふべのいろの草の市

をみなへし羽虫まつはるままに買ふ

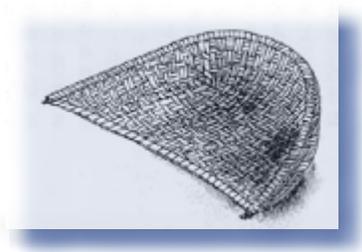
露の玉のせて蓮の葉売られをり

草市や地べたの上を銭渡り

盆唄のまづたましひを呼ばむこゑ

舟きしむ音にはやされ踊るかな  
踊笠脱ぎてこの世の貌となる  
地藏会の西瓜どの子も撫でにくる  
地藏会の抱き回さるる赤子かな  
地藏会の法話にぐづる足の指  
心経をとほくに鮎の錆びゆくか  
秋風を見送る下駄をそろへけり

月遅れの師の忌に



# 竹間集

同人作品



秋七草

門伝 史会

いかづちの一喝うけて秋立てり  
吐き出せる泡追ひかける金魚かな  
調律師全身耳に花木糧  
忘却を憂ふ語り部原爆忌  
青空を仰ぐ八月十五日  
盆法話母の言葉と思ひけり  
秋七草駆け込み寺に数へをり

文 月

鈴木 石花

再診の紹介状や残る蟬  
病む身にてちちはは迎ふ盆用意  
病む腕を伸ばして洗ふ父母の墓  
指先に気だるさ残る秋暑し  
文月や電子に勝る手書き文  
水琴のリズミカルなる星月夜  
桐一葉続きて一葉黄昏るる

良 夜

山田 暢子

いつしかに秋の日傘となりてぬし  
泡立ち草嫌はれていること知らず  
行く夏の海へ夫に逢ひにゆく  
さざ波を空へ返して鳥渡る  
囁きに似てコスモスの揺れやまず  
良夜とは月の光に濡るること  
震度七静かな秋を裏返す

器 忌 岩木 茂

波郷桂郎をはせる寺のお風入  
器忌を来て桂郎の碑洗ふ  
大輪の南瓜の花や器の忌  
器忌や蓮の花の百揺るる  
桂郎の盃に散る百日紅  
桂郎に三步下がれる器の忌  
夏萩や風のしだるる瑞光寺

夕ひぐらし 小林 輝子

七月や孫もドレスも白統に  
キャンドルを灯す夏手袋の孫  
正装の孫涼やかに遠くなる  
器忌や朝靄かかる茄子の花  
早咲きのりんだうを挿す師の忌かな  
送り盆注、あぶ流しは盆の頃降る霖雨のこし、蛇を流す意。きのふや村に虻流し  
器師の言の葉かとも夕ひぐらし

蟬 涼し 宮川みね子

白日傘検診すべて異状なし  
八月や一万歩へとあと少し  
八月の風吹く富士となりけり  
またすこし痩せしとおもふ夏衣  
衣更へて向学心に燃ゆるかな  
青林檎むいて亡き父思ひけり  
蟬涼し熱き茶ほしくなりにけり

白障子 浜 福恵

一番手なる岬の田をゆくコンバイン  
ドツヂボールほどの瓜坊とび出だす  
無患子の実の青々と地藏盆  
界限に子ども昇龍の増えし地藏盆  
まだ針昇龍に糸が通せて夜長かな  
縫針一本待針四本の夜なべごと  
嵐の去りし朝しらじらと白障子

# 山河集

同人作品



南うみを選

盆踊り果てて手足のまだ踊る  
地藏会や道ゆく人も迎へ入れ  
蕎麦打つて振る舞ひ賜ふ生身魂  
峰雲や幼のつくる力瘤  
電話来るBGMの蟬時雨

渡辺や

夕暮れて海鳴り高し合歡の花  
後ろ手を風の過ぎゆく魂送り  
横向きに小さく眠る盆の夜  
花びらの漂ふごとく金魚浮く  
白木槿落ちて深まる庭の闇

石井秀二

涼やかに挫折を語る法話かな  
長々と焔灼けてをりビル工事  
夕焼を残し「飛鳥Ⅱ」出航す

森田 節子

秋簾木遣の鳶の影の過ぐ  
秋立つや落葉松林に風のみち  
高鳴りし重籐の弦今朝の秋  
朝顔にホースの虹の色を足す  
釣舟に佇つ影淡し夏の果  
秋簾西日は愁ひ持ちはじむ  
盆花に太る永代供養塔

岡本 尊子

早稲穂出で花掛水を急かしけり  
吉野より大和に下りし稲びかり  
黒雲を割きて大和の稲びかり  
羽抜鶏木影の大地搔き廻す  
草市や我が家に無きをまづ探し

上辻 蒼人

# みどりのしづく

小原芙美子

塗り椀の少しくくもる寒露かな  
神渡し小舟の影の揺らぎあり  
杣山の雫のやうな冬桜  
レノン忌の黄身の片寄る茹で玉子  
花八手父に晩年あらざりき  
浦西風や白波由良を遡る  
由良の門に枯草の丈揃ひ立つ  
沼涸れて連山の影迫り来る  
冬帽子被り直して別れたり  
搗きたて餅盤切にどかと置く  
郵便夫雪の匂ひをまとひ来る  
春めくと薬味のつんと胡麻豆腐  
料峭の邑がうがうと水流る  
ノクターンの端に恋猫ゐるらしく  
はつはつと辛夷は白をふやしゆく

第 41 回桂郎賞俳句部門佳作

お齒黒の少しく見ゆる享保雛  
三方を持ちて反りぎみ官女雛  
雛飾る泣きの仕丁の八の眉  
朝日子の中より燕来たりけり  
釣り人のをり土筆摘んでをり  
新茶てふみどりのしづくふみけり  
もりあをがへる笑ひ上戸の女学生  
夜上りの風の重たき濃紫陽花  
俎板をはみだす青菜梅雨明くる  
青柿のすでに頬骨張り出して  
たぶの木に集まってゐる白雨かな  
松明の炎が風を呼ぶ虫送り  
滝落ちて山の真みどりまつ二つ  
雨靄の霽れて青嶺の高さかな  
白玉の眩しきひと日晴れ渡る

# 日々是好日

山田 健太

遠足の財布に太き紐つけて  
こどもの日鼠を取らぬ猫とゐて  
追炊の焦げ目の旨き田植かな  
板の間に鼻血のあとや青田風  
父卒寿青田の端に存へて  
新緑の木漏れ日揺るる陶の椅子  
黴の世の腹式呼吸せよといふ  
大好きな火曜日過ぎて柿の花  
乗り出して身の反り返る燕の子  
つばくろの巢立ち間近き毛繕ひ  
あぢさゐや朱色を好む耳飾り  
白南風の弘道館の敷居かな  
白南風の分けても人氣匂ひ立つ  
七夕の竹に間近きネックレス  
三毛猫の臍の上なる昼寝かな

第 41 回桂郎賞俳句部門佳作

校庭の放射線量夏休み  
炎天の地べたに小犬鼻つけて  
ゆるやかに四肢の伸びゆく蚩狩  
短夜の母のあとゆく貰ひ風呂  
女教師の椅子に芍薬置いてあり  
下顎を乗せ夏帽のへこみたる  
大好きな水羊羹の水曜日  
夏の地震かるく机をゆらしをり  
夏帽を被り直して引き返す  
叱られて腹当てのまま立つてをり  
涼風の東司の渡り廊下かな  
腹巻の竜におどろく雛妓かな  
首塚の竹藪に月掛かりけり  
海賊の和合してゐる月夜かな  
虫籠は非常階段より失せて

# 風土独語／南 うみを

盆踊り果てて手足のまだ踊る

渡辺 やや

この句は「手足のまだ踊る」が読み手の経験を呼び覚まし、頷かせます。堪能するほど踊ったことをずばりと伝えていきます。



新涼やアルトサククス胸に聴く

上村 葉子

この句の読みのポイントは「胸に聴く」です。本格的な涼しさの空気を震わせ、アルトサククスの高く澄んだ音色が響きます。秋の音色を胸で直接受け止めるところがよいです。

後ろ手を風の過ぎゆく魂送り

石井 秀一

作者は精霊を送る火を起こし、別れを惜しんでいます。背中をささつと風が通り過ぎました。ああ、これは精霊がああ世へ旅立つ合図なのだと感じたのです。「後手を過ぎゆく」が巧みです。

炎天と言ふ静けさのありにけり

島 玲子

炎天はその暑さ故、鳥も飛ばないと言われます。すべてのものが暑さに耐える真昼間は、音さえ消える異次元の世界です。作者はあらためてその「静けさ」を全身で感じていきます。

涼やかに挫折を語る法話かな

森田 節子

この句、例えば瀬戸内寂聴の法話を想像したらいいでしょう。挫折が人生の糧になることを淡々と話しています。「涼やかに」はもちろん心の涼しさです。

堕ちし蛾の翅震はせて蟻弾く

谷田明日香

自然は命の生流転に満ちています。だからこそ自然なのです。作者は今、終わらんとする命を見つめています。やがて蟻の餌になる蛾の、最後の抵抗を言葉に定着させました。

高鳴りし重藤の弦今朝の秋

岡本 尚子

「重藤」は大将などが用いた、下地が黒く、引藤で密に巻いた弓です。弓道場でしょうか。矢を放った弓弦が、「今朝の秋」のひやかな空気に鳴り響きました。引き締まった表現世界です。

新豆腐沈めて火星接近す

赤石 梨花

この句は「新豆腐」と「火星」の取り合わせですが、直接の関係はありません。しかし「新豆腐」を作る季節の営みと、火星が地球に近づく宇宙のいとなみはどこかで繋がっています。宇宙の中の地球、地球の中の自然、自然の中の人間なのです。

吉野より大和に下りし稲びかり

上辻 蒼人

作者は「吉野」と「大和」という地霊を呼び覚ましながら、雄大な景と、稲の豊穡をうながす「稲びかり」とを結びつけました。吉野に近い大和に住む作者ならではの土地誉めの句です。へ以下

# 風土集



## 南うみを選

赤のまま歩き初めの児の三歩 千葉 上村 葉子

新涼やアルトサククス胸に聴く  
送り火や元号四つ生きし父母  
角ばつて男踊りの風の盆

秋暑しあごに張りつくオブラート  
滝の水岩に沿ひ来てうすみどり 阿南 島 玲子

夏を病み母に近づく思ひかな  
炎天と言ふ静けさのありにけり  
出勤のナースへがばと水を打つ  
落伍することも楽しき花野かな  
墮ちし蛾の翅震はせて蟻弾く

舞鶴 谷田明日香

風に乗り田の一枚を蝗飛ばす  
棚経に今朝の門扉は開いてをり  
閑伽水をペットボトルに墓参り  
電車にて正座してゐる半ズボン

遊行寺の本堂広き夏書かな 横浜 赤石 梨花

処暑の風鎌倉古道吹き通す  
新豆腐沈めて火星接近す  
初秋やワイングラスの脚長き

房総に醬の匂ひ秋に入る  
盆棚に子の文机を借用す 水戸 山田 健太

諸掘りの園児はすでにうでまくり  
馬追の飛び損ねたる広辞苑  
園庭の花圃のひとつはめ組です  
我ミート妻ナポリタン今朝の秋

人去りし部屋の広さやつくつくし 舞鶴 塩尻 きぬ

秋の日やミニ豚小さき尻尾振る  
葡萄棚名残りの房の下がりをり  
秋うららポニー無心に草食めり  
よき日和穂紫蘇に羽虫飛び交つて